

# 『儒林外史』の「把」について

白 澤 寛 子

## 1. はじめに

『儒林外史』は、当時の標準語的口語のひとつである、下江官話を基礎に書かれている。そして、その上に江南地方の方言がかなり取り入れられており、こうした点において、『儒林外史』は、語学的研究資料として価値が高いといえる。本稿は、『儒林外史』のはらむ語法的問題を解明する端緒として、「把」を取り上げる。この「把」の用例には、多種多様なもの認められるが、本稿では、次の3つの用法を中心にして述べる。<sup>(1)</sup>

- ・概数を表す用法。
- ・介詞としての用法。
- ・兼語式に使われる用法。

## 2. 「把」の用法

### 2-1. 概数を表す用法

概数を表す「把」には、数詞の後に続くものと量詞の後に続くものと2通りがある。

まず、数詞の後に続いて概数を表す「把」の用例を挙げる。

- ① 怕不一年要尋千把银子（第2回）
- ② 包你这千把银子手到拿来（第31回）
- ③ 中山王府里发了几百兵，有千把枝火把（第35回）

『儒林外史』における、この「把」の用例は、「千」の後にしか続かず、他の数詞はとらない。そして、この「千把」は「千ほど」と訳し出せるが、千以上の数にはならない<sup>(2)</sup>。また、例③の「火把」以外は、「银子」にしか使われていなかった。

次に、量詞の後に続く「把」の例を挙げていくことにする。

- ④ 忙了个把月（第3回）
- ⑤ 踢起有丈把高（第10回）

⑥ 諸葛天申称了两把银子给他收着再算（第29回）

⑦ 邹吉甫道「你老人家因打这年把官司」（第11回）

「个」「丈」「两」といった量詞が先にあり、その後ろに「把」がきている。量詞の後に続く「把」の場合、これから後に挙げる例を含めて、全て、量詞の前には「一」が省略されており、具体的な数が明示されることはない<sup>(3)</sup>。例④から⑦の「把」は、「～余り」といった意味であると考えられる<sup>(4)</sup>。たとえば、例④なら「一ヶ月余り」、例⑤なら「一丈余りの高さ」といった意味になろう。特に、例⑦の場合、この用例に先立つ第9回に、

邹吉甫道「～。而今已在监里将有一年半了。」（第9回）

という記述があり、この「你老人家」なる人物が、監獄に入っていたのが、一年半であることがはっきりしている。したがって、例⑦は、「あなたが、この一年余り、捕まっていたからですよ」と解釈できるのである<sup>(5)</sup>。

しかし、この「～余り」という解釈が、全ての用例にあてはまるわけではない。

⑧ 道「你问我借盘缠，我一天杀一个猪还赚不得钱把银子」（第3回）

⑨ 諸葛天申称出钱把银子，托季恬逸出去买酒菜（第28回）

⑩ 夏总甲道「～。那得功夫来着乡里这条把灯？」（第2回）

例⑧では、胡屠戸が、娘婿で万年童生の范進に、郷試を受けに行く旅費を無心されて、「俺は、日に一頭豚を殺しても、ほんの少ししか儲けられやしないんだぞ」と怒っている。例⑨は、諸葛天申が酒の肴を買うために、「ほんの少し銀をはかり出した」場面である。こうして考えてくると、この2例の「钱把银子」が、「一銭余りの銀」とは解釈できないことが分かる。次の例⑩も、「このたった一本ばかりの竜灯を田舎に見に来る暇がどこにあるっていうんだ」と解釈できる。つまり、これらの用例には、「ほんの」「たった」といった、極めて少ない量を意味するニュアンスが含まれているのである。

このように、量詞の後に続く「把」には、「～余り」と解釈できる場合と、「ほんの」「たった」といったニュアンスを含む場合とがある。しかし、こうしたニュアンスを全く含まない用例も存在する。

⑪ 問道「我记得你家老太太该在这年把正七十岁」（第25回）

⑫ 黄客人替他买了一顶方巾，添了件把衣服，一双靴（第23回）

黎錦熙氏の論文<sup>(6)</sup>では、例⑪を取り上げて、「此指时期」と説明している。つまり、この「把」は、「这（一）年」という時期を、時間的なはばをもたせて表現するという役割を果たしているのであって、「～余り」あるいは「ほん

の「たった」といった、ニュアンスは含んでいない。よって、この用例は「おたくの奥様は今年あたり、ちょうど70歳でしたね」と解釈することができる<sup>(7)</sup>。

次の例⑫では、黄客人は、身ぐるみ剥がれた男に、好意で「件把衣服」を買いたしてやっている。この「把」に「ほんの」「たった」といった、量として極めて少ないというニュアンスをあてることは適当でない。また、この用例は「～余り」としても解釈できない。先に挙げた④から⑦の例の場合は、「把」の前の量詞が、高さや重さ、時間を表しており、半端な数量をとることが可能であった。しかし、例⑫の「衣服」の場合は、半端な数量をとることはできず、④から⑦の例と同一には扱えない。したがって、この例を敢えて解するなら「黄さんは、彼のために方巾を買い、それに、1、2着の服と靴までたしてくれた」となる<sup>(8)</sup>。

半端な数量をとれないという点については、例⑩の「灯」と例⑫の「衣服」は同じものである。ところが、例⑩には「たった（一本）」という解釈をあて、例⑫には「1、2着」という解釈をあてざるをえない。量詞の後に続く、同じ「把」でありながら、場合に応じて解釈を変えなくてはならないとは、おかしいことである。

この矛盾を、逆に考えると、こうした解釈やニュアンスといったものは文脈あるいは量詞から、解釈し分けられるにすぎないものであるといえる。例⑦の「这年把」は、「一年半」をさしていることが先にわかっているから、「この一年余り」と解釈できるのである。例⑧と⑨に「ほんの」というニュアンスが生じるのは、「银子」のとり重さの単位として、量詞「钱」が最少であることと無関係ではない。こうした文脈や量詞にとらわれることなく、「把」本来の役割だけをつきつめていくと、それは、何のニュアンスも含まない例⑪と⑬において、明かになっている。

例⑪の「这年把」は、「这（一）年」を、時間的な余裕をもたせて表現している。例⑬の「件把衣服」は、「一件衣服」と言い切らずに、「把」を置くことによって、やはり余裕をもった表現をしている。つまり、「把」本来の役割とは、具体的な数量をはっきり指し示さずに、おおまかにとらえて、余裕をもたせて表現する、ということに帰納できるのである。何のニュアンスも含まないからこそ、こうした「把」本来の役割が、はっきり見えてくるのである。余裕をもたせて表現することが主眼であるからこそ、半端な数量のとれない「衣服」といったものにも、「把」がつくことができるのだともいえる。すなわち、どのように解釈できる場合にも、そして、どんな量詞に続く場合にも、「把」本

来の役割に変化はないのである。<sup>9)</sup>

## 2-2. 介詞としての用法

「把」の介詞としての用法には、処置式で賓語を動詞の前にもってくる用法と、方法や手段などを提示する用法の2通りがある。

まず、処置式としての用法には、『儒林外史』と現在とで変わるところはない。しかし、『儒林外史』において、処置式に用いられる介詞は「把」だけではない。「将」と「拿」の2語も、「把」と同様に処置式に用いられている。

『儒林外史』とほぼ同時期に成立した『紅樓夢』では、「把」は会話文に、「将」は地の文に、と区別して使用されている。明らかに口語と文言の、それぞれ読者に与える印象や効果を考慮して、かなり意識的に「把」と「将」の使い分けを行っている<sup>10)</sup>。ところが、『儒林外史』においては両者は殆ど区別なく用いられている。

- ① 杨执中道「～。如今我去向他说，把他交与差人」(第13回)
- ② 向知县急了，说道「也罢，我这里差两个衙役把这夫人解回绍兴。」(第24回)
- ③ 牛浦见他们众人把行李搬上了船(第22回)
- ④ 两个解役把牛奶奶解往绍兴去了(第24回)
- ⑤ 蘧太守道「～，何不就将你讨来银子送他盘费。」(第8回)
- ⑥ 按察使道「我如今将这些缘故写一个书子」(第24回)
- ⑦ 将一个小纸包递与宦成。(第11回)
- ⑧ 叫人跟去将箱子取来毁了。(第14回)

このように、『儒林外史』においては、「把」も「将」も、会話文、地の文の両方に使用されており、混在していて、口語と文言の差異は殆ど意識されていないといえるのである<sup>11)</sup>。

そして、処置式にはもう一つ、「把」の代わりに、「拿」が介詞として使用されている。これは、江南方言の特色であるという<sup>12)</sup>。

- ⑨ 晚间拿些牛肉，白酒与他吃了。(第12回)
- ⑩ 随即拿二十两银子递与匡超人，叫他带在寓外做盘费。(第19回)
- ⑪ 倪老爹来了，吃过茶点心，拿这乐器修补。(第25回)

この「拿」は、「もつ」という意味の動詞であって介詞ではない、とみなすこともできる。しかし、ほぼ同じ形をとる「把」の用例とひき比べてみると、この「拿」が処置式の介詞として使われていることが分かる。

⑫ 老和尚道「你既然欢喜，再念几时我把两本诗与你看」（第21回）

⑬ 金先生道「～。我把对联递与他。」（第28回）

⑭ 鲍文卿回来和浑家说下，把乐器都揩抹净了。（第25回）

そして、さらに、「拿」が処置式の介詞として用いられていることを裏付ける例として、次のようなテキスト間の書換えも存在する。

⑮ 太公～说道「那日再祠堂里彼此争论，他竟把我打起来」（第16回）

⑯ 夏总甲～道「把我的驴牵在后园槽上，卸了鞍子，将些草喂的饱饱的。」（第2回）

例⑮では、「申一本」が「把」を「拿」に、そして、例⑯では、「増補齊本」が「将」をやはり「拿」に書き換えている。これは、「増補齊本」「申一本」各本の編者も、この「拿」を「把」「将」と同じだとみていることを示している。

さて、「把」にしても「将」<sup>⑭</sup>にしても、介詞としての用法は、「手に握りもつ」という動詞としての意味が、はっきりとした動作に限られず、広く用いられるようになって、生まれたものである<sup>⑭</sup>。そして、「拿」という語にも、「もつ」という動詞の意味が強くなるからこそ、「将」や「把」と緊密なつながりをみせ、処置式の介詞として、同様に用いられるようになったといえる。すなわち、「拿」が、処置式の介詞として用いられるのは、結局「手の動作——『もつ』という意味をもったものが選ばれ」<sup>⑭</sup>たのだといえるのである。

そして、この「将」「把」「拿」の3語は、動詞の「もつ」という意味で、緊密につながることによって、方法や手段を提示する介詞としても、同様に用いられている。以下、『儒林外史』中の、方法や手段を提示する用例を示す。

⑰ 船家把绳子拴了船（第9回）

⑱ 忙着道集上，把剩得盘程银买了一只猪蹄家来煨着，晚上与太公吃。（第16回）

⑲ 两人将袖子拂去尘灰看了。（第48回）

⑳ 又将自己盘费买了一副香纸牲礼（第48回）

㉑ 老和尚道「～，人家拿大钱请先生教子弟」（第21回）

このような「把」や「将」の用法は、現在でも北京語以外のその他の方言では、使われることもあるという<sup>⑭</sup>。そして、下江官話を基礎として書かれた『儒林外史』には、この用法が存在するのである。

### 2-3. 兼語式に使われる用法

兼語式は、一般に『『给』（与）+人+動詞』という形をとる。『儒林外史』

においても、多くは「給」と「与」が使われている。

① 邹吉甫叫他的儿子邹二来看，也给他见见广大。(第11回)

② 牛浦道「～还是坐著同老爷打躬作揖的好，还是捧茶给老爷吃，走错路，惹老爷笑的好。」(第22回)

③ 季苇萧指着对联与他看(第28回)

④ 杜慎卿道「～，这奴才好酒，你买些酒与他吃」(第31回)

上記の例のように、「給」も「与」も、ともに会話文、地の文の両方に用いられており、やはり、混在しているといった使用状況である。しかし、『儒林外史』における「給」の使用度は余り高くない。一回にせいぜい1～4例程度、多くて10例、全く使われない回もある<sup>40</sup>。そして、「給」だけに限っていうと、その用例の8割強が会話文に出現している。明らかに作者は、「給」が「与」に比べて、口語的であることを意識して、会話文に集中させているのである。これは、先述の介詞としての用法における「把」と「将」が、口語と文言の差異を意識されることなく、用いられていたのとは異なる。

さて、「把」についても、以下のように、「給」「与」とほぼ同じ用法がみられる。<sup>41</sup>

⑤ 赵氏道「况他又心慈，见那些穷亲戚，自己吃不成，也要把人吃，穿不成的，也要把人穿。」(第5回)

⑥ 差人道「～，我又不要你十两五两，没来由把难题把你做怎的。」(第14回)

⑦ 季苇萧道「～，苟年伯就送了我一百二十两银子，又把我在瓜洲管关税」(第28回)

このうち、例⑤の「把」は、2例とも「増補齊本」が、例⑥は「申一本」と「申二本」が、それぞれ「与」に書き換えている。このテキスト間の異同からも、これらの「把」が「給」「与」と同じであり、「～させる」という使役的な意味で使われていることがはっきりする。しかも、こういった「把」は、いづれも会話文に出現している。

このような「把」の使い方は、下江官話の特徴であるという<sup>42</sup>。そして、これらの用例が会話文に集中していることから、この「把」には、「給」や「与」では、表しきれないニュアンスが託されている可能性がある。

まず、例⑤のセリフの主は、敝致和という監生の姿である。死んだ本妻の人柄の良さを、主人に一生懸命分からせようとしている所である。この姿、重病の本妻が死ねば、自分が本妻になれることに気付かない、ちょっと間の抜けた

女である。例⑥は、当代随一の選文家・馬二先生を恐喝する、小使いのセリフである。この二人に共通していえることは、一様に教養や社会的地位の低い人間だということである。つまり、この「把」は、余り品の良くない言葉遣いであると考えられる。さて、次の、例⑦のセリフの主の季葦蕭は秀才であり、教養も社会的地位も高い人間ではある。しかし、実際には、「私たち風流人は、才子佳人にめぐりあいさえすれば、女房が一人だろうと二人だろうと、おかしくはないのです」といってはばからないような男である。季葦蕭のセリフに「把」を使ったのは、風流人を気取っているこの秀才が、実は薄っぺらな人間であることを知らしめるための、皮肉な使い方なのである。逆にいえば、この「把」をわざわざ「与」に書換えた「増補齊本」「申一本」「申二本」の各本は、「把」が演出する、教養の低さや品の無さなどの様子をも、同時に奪ってしまったことになるのである<sup>4)</sup>。

### 3. まとめ

さて、今まで『儒林外史』における「把」について、概数を表す用法、介詞としての用法、兼語式に使われる用法の3つに関して述べてきた。まず、概数を表す「把」は、具体的な数量等をはっきり指し示さず、おおまかにとらえて、余裕をもたせて表現する役割を果たしていることが明かとなった。次の介詞としての用法には、処置式と方法や手段を表す用法の2通りがあり、「把」と同様の働きをもつ、「将」「拿」の2語が存在した。それは、これら3語がともに「もつ」という動詞の意味を強くもっていて、緊密に結び付いているためである。また、兼語式に使われる「把」は、会話文に出現した。それは、「与」に比べてより口語的な「給」が、会話文に集中するのと同様である。そして、これら3つの用法は、諸テキスト間の文字の異同からも、確認することができるのである。

#### 注

- (1) 主に、諸テキスト間の文字の異同を調査し、用例を広く採集することによって、その意味を考察していく。まず、底本には最も信頼に足る「臥閑草堂本」（人民文学出版社影印 1977年）を用いた。テキストの比較には、『儒林外史会校会評本』（李漢秋氏轉校 上海古籍出版社 1984年）の校勘表と、『国学基本叢書』（王雲五氏主編 台湾商務印書館 中華民國57年）、『増補齊省堂儒林外史』（中国書店影印 1988年）を用いた。本稿中の、「申報館第二次排印本」（簡称：「申二本」）は『国学基本叢書』に、「上海鴻宝齋増補齊省堂本」（簡称：「増補齊本」）は『増補齊省堂儒林外史』にあたる。

また、『儒林外史校会評本』からは、「申報館第一次排印本」(簡稱:「申一本」)を用いている。

- (2) 黎錦熙氏「説“把”(下)」(『漢語釋詞論文集』科学出版社1957年11月(p.86))に、「千把」犹云“一千左右”，但不能到一千以上。

と説明されている。

また、「把」の後ろに、やはり概数を表す「多」が置かれている例があった。

除还债赎当，还落了有千把多银子(第33回)

- (3) 注(2)前掲論文による。

- (4) 『拍案驚奇』(上海古籍出版社 1982年)中の「年把」という語に施された王古魯氏の注(巻12 p.212)に、

吳語，「把」约记之词，「有余」之意。

とある。

また、数詞の後に続く場合「把」と同様、「把」の後ろに「多」がきている例があった。

不在意里，起来又走了里把多路。(第14回)

- (5) 例⑥と⑦の場合、「増補齊本」では、この「把」が省略されてしまっている。「把」がなくとも大意に影響のないことが明かである。

- (6) 注(2)前掲論文(p.86)。

- (7) 「増補齊本」は、「在这年把正七十岁」を「在这年来七十岁」に書き換えている。「把」がおおよそのものをさし、「正」が丁度という意味をもつために矛盾に感じ、やはり概数を表す「来」に書き換えたのではないかと考えられる。

- (8) 注(4)の『拍案驚奇』中の「个把(人)」という語に付された王古魯氏の注(巻19 p.336)に、「一个两个」とある。端数をとれないものについては「1、2人」と解釈する他はないことが分かる。

- (9) この量詞あるいは数詞に続いて概数を表す「把」は、注(4)で挙げたように王古魯氏が『拍案驚奇』に「吳語」として注を施しているし、また注(2)の黎錦熙氏の論文が、『儒林外史』以降の用例も「《官場現形記》《老残遊記》《海上花列伝》など下江官話系のものから採っている」ことから、「やはりもとは下江官話系のものである」と考えられる。(引用部分:香坂順一氏「清末短編小説のことば—下江官話の性格—」『白話語彙の研究』光生館 昭和58年(p.383))

- (10) 太田辰夫氏「紅樓夢の言語」『中国の八大小説』大阪市立大学中国文学研究室編 平凡社 昭和40年(p.352)

- (11) 諸テキスト間の文字の異同においても「将」と「把」が混在していることが明かである。

张静斋「～，取一面大枷柳了，把牛肉堆在枷上」(第4回)

この会話文中の「把」を、「申一本」では、「将」に書き換えている。また、このすぐ後の地の文に、次のような、ほぼ同じ文が現れる。

取一面大枷，把那五十斤牛肉都堆在枷上(第4回)



ここでは、「把」が用いられており、会話文には「把」、地の文には「将」といった使い分けが意識されていないことが分かる。

- (12) 宮田一郎氏「儒外外史のことは」『人文研究』大阪市立大学文学部紀要 第28巻 第4分冊 1976年 (p.254)

- (13) 例えば「将」の動詞としての傾向の強さを示すものとして、次のような例がある。

金有余将着银子，上了藩库，讨出库收来。(第3回)

- (14) 太田辰夫氏『中国語歴史文法』江南書院 1958年 (p.258)

- (15) 香坂順一氏「旧白話雑記」『白話語彙の研究』(p.328)

- (16) 太田辰夫氏「北京語の文法特点」『久重福三郎・坂本一郎還暦記念中国研究一経済・文学・語学一』1965年 (p.51)

- (17) 明代以前には、多くは「給」よりも「与」が用いられていた。現代のように「給」優勢へと、その交代が始まったのは、丁度この『儒林外史』や『紅樓夢』の頃であるという。(香坂順一氏「中国近世語ノート」『白話語彙の研究』(p.219)による)

- (18) 兼語式だけでなく、「与える」という意味の動詞としても「把」は「給」の代わりに用いられている。

虞家小厮又悄悄的后门口叫了一个卖草的，把他四个钱(第47回)

- (19) 注(9)前掲論文 (p.388) による。

- (20) 「与」は、兼語式に使われる「給」「与」「把」の3語の中で、最も頻繁に現れる。しかも、地の文、会話文の両方に用いられている。「申一本」「申二本」「増補齊本」の各本が書き換えたのは、会話文に集中的に現れる「給」ではなく、この最も使用頻度の高い「与」である。下江官話の「把」に比べると、この3本の書き換えた「与」が、話の内容以上のものは伝えてこないことが、ここから明かである。逆にいうと、この3本の書き換えは、「把」のもつニュアンスを奪った、実に不確実な書き換えであるといえる。

(筑波大学大学院)